



補習授業校生に贈る親からのメッセージ！

身近な卒業生に補習授業校を続けてきて良かったこと等を話してもらうために、秋にL I校で高学年向けに「卒業生に話を聞く会」を催しました。その後、保護者の中にも元補習授業校生がいるので、是非そうした方々から、補習授業校への思いを寄せていただいたら子ども達の励みになるのでは、とお話しがありました。これを受けて担当の山内教頭がこの暮れにL I校保護者にメッセージのお願いをしました。年明けに3名の元補習授業校生の方々と1名の保護者からメッセージが届きました。ここに全文をご紹介します。子ども達にも是非聞かせてあげて下さい。

【メッセージその1】

小学校5年生から高校卒業まで補習校に通っていました。苦しい時期はなく、疑問に思ったこともありませんでした。日本語はそれなりに出来ているという意識でしたが、日本の大学でいかに自分の日本語力が限られたものであるかがわかりました。と同時に、英語でも日本語でも質やレベルに個人差がかなりあり、そういった語学力はどこに住んでいるかではなく本人の意識や努力に比例するのだと感じました。日本の大学院で英語の文献を多くこなさなくてはいけなくなると、実は英語の読書速度は高まりましたし、社会人になって日経を読み始めると、最初は一頁を読むのも大変だったのが、全ての記事を朝一で読んでしまえるようになりました。何事も、そして特に語学に関しては、練習さえすれば力がつき、また日々の積み重ねと努力の繰り返しが肝要だと思います。子供はアメリカ人の父親をもつ米国生まれで、日本語力は常に課題ですが、たとえ少しでも毎日やること、わからなくても間違えても忘れても何度でもやらせてみることにしています。私自身補習校に通って、他の同じような境遇にある子供、人達に出会って話を出来たことは貴重でした。大学受験や現地校の情報交換等もした記憶があります。高校の時のクラスメートは、今でも親友です。国語の教科書の文に触れる機会を与えられて、自分では読まないような文体や書き物の存在を知り、そこから様々な価値観や意見やスタイルを吸収することができました。例えば男女平等に関する考え方は、その時の意見文に影響を受けたと思います。何人かの先生方のこと、先生方のおっしゃったこと、きちんと教えてくださったことや遊んでくださったことも、心に残っています。毎週の漢字テストは、練習、維持面で役立ったと思います。帰国子女と言ってもいろいろであることを肌で知り、自分なりに自信を持って答えられる部分は増えたと思います。複数の文化、言語、国の選択を与えられた若い人達にとって、アイデンティティの形成、そして自分なりのしあわせを見つける力をつけることは最も大事なことのようには思います。補習校を通じてであれ、土曜日を他のことに使うのであれ、子供達にとって良い友人や指導者に恵まれ、自分が成長、開花できるような環境の中で、自分が属する社会や独自のアイデンティティを見つけてほしいです。子供が精一杯に生きてしあわせになれる形をサポートしてやりたいです。それが補習校を辞めて、例えばリトルリーグに専念する、ということでも構わないと思っています。ただ、日本で体験入学をすることは貴重ですし、そのためには補習校の学習は欠かせません。それから、(私の頃、私の通った補習校は全く違いましたが) L I校のように保護者が本当にサポート、関与している状態は素晴らしい、現地校では経験できない素晴らしい体制だと思います。最後に(私の時は皆駐在員子女だったので全く違いますが)私の補習校の体験がそうであったように、息子もまた類似した境遇の友人と学習し遊んでいるのは大きなプラスだと思っています。苦しいこともあるようですが、同じように苦しんだり、つまずいたりする仲間がいることはどんなに心強いことでしょう。保護者の私達も、様々な試行錯誤の中、子供のことを心から想って育てていっている仲間を極めて有効なサポート・グループとして大いに活用できたらと願っています。

【メッセージその2】

私は当時Q校(クイーンズ・小)とL校(ロングアイランド・中高)へ年長から高三まで通いました。日本のバブルの時に駐在と永住組の生徒達が半々位でした。今はL I校に通っている息子がいます。小学生だったころは母によくしかられながらドリルやノートに漢字を何回も何回も練習した思いがあります。現地校であまりやらない教科書の音読は内気な私にとっ

て苦手だったけれど、学年が上がって行く内に自信が付き、数学の次に好きな科目でした。中高生になってキャンパスも変わりました。多くの先輩達に囲まれながら友達に会うことを楽しみに通ってました。家庭と彼らの影響で（当時はインターネットもパソコンもなかったので、限られた日本語のテープやテレビ番組を聞いたり見たりした）日本の音楽や漫画に興味を持ち出しました。補習校の友達とピンクレディーやチェッカーズの曲の振り付けをしながら遊んだ思い出がたくさんあります。高校になって大学への受験が大変になった時は補習校の先生方に大変お世話になりました。微積分学で家庭教師をして下さった岡本先生や科学プロジェクトを提出する前に評価してくださった土谷先生、複雑な人間関係の相談にのってくれたちょっとダンディーな赤坂先生。皆、頭がよくて尊敬していました。高三の9月になってほとんどのクラスメートが大学に行って補習校を退学した時、私は半分意地で半分両親の意思で三月の卒業までボストンの大学から通うことにしました。今振り返って見ればもう20年経っていますが、これだけの文章を今私が書けるということは補習校と両親の励ましのお陰です。そして補習校だけではなくその周りにいた人達、日本語キャンプや、日本の親戚、体験入学等々、今迄にかかわって来たすべての人たちと自分の経験からはぐくまれた日本語力と思っています。息子にも同じような経験を与えたいのですが、どこまで続くか不安です。今はとにかく一生懸命やっているその気持ちを大切にしながら通っています。息子のクラスメートの親御さんが話されていました。「人生でぼくは二つ後悔していることがある。一つは父の死に目にあえなかった事、もう一つは補習校を三年生でやめたこと」。いつ、どこで日本語が役立つかは皆さん一人一人によって違いますけれど、私にとって補習校へ通って本当に良かったことは、日本語が母国語の両親と充実した会話が出来ることです。親から受け継ぐ知識、アドバイスや習慣はとても大事なことで信じています。今通っている皆さんも後悔がないよう頑張ってください。

【メッセージその3】

「今の君には分からないかも知れないが、大人になったら補習校に感謝するようになるよ」と励ましの言葉は無視するばかりの当時の私が、20年程もたった今、毎週通っている皆さんに応援のメッセージを送ることになった。週末なのに学校に行かなければならないことの辛さ、私には十分理解できる。私も土曜日のリトルリーグの試合を欠席したり、友達のパーティーで遊べなかったりと数え切れない程の痛い思いを繰り返し経験してきたからだ。それが今になって補習校に通っていて本当に良かったと思えるようになったのだ。なぜかと、その理由を一つに纏めて言うと、それは今の私の仕事だ。もし補習校がなかったら、私には今の仕事は無理だということは過言ではない。当時、家賃を払ったこともなく、両親のそばさえ離れたこともない私にそんなことを言っても聞き捨てに終わっていただろう。既に気付き始めている皆さんもいるだろうが、私の場合は、初めて社会に出て、生活の苦勞を味わって、毎週土曜日に楽でいられた友達と（プロ野球選手の友達を除いて…）、毎週土曜日に自己投資していた自分を比較し、その差が今になって初めて明らかになったと感じている（アリとキリギリスみたい）。日本語という武器を自分でどう使うかは個人の選択肢。例えば、私のように日本語を話せる人にしかできない仕事を手に入れることは、長年の苦勞がようやく成果として返ってきたことになる。こうした経験がなかったら、私も補習校に感謝することは難しかったのではないかと思われる。ただし、これは私の今の言葉ではなく、あなたの将来の経験で気付くべきだ。生徒の皆さんが、近い内にそんな経験をされることを心よりお祈りしております。

【メッセージその4】（補習校に通わせた保護者から）

子供たちが初等部時代は「魔の金曜日」と言われるように大変な思い、形相で宿題をやらせました。父母会の準備や電話連絡も受けながら夕食の準備もままならない金曜日の夕方でした。親子で必死でした。

それぞれ子供たちが現地校のミドルスクール、ハイスクールと成長するにしたがい、子供の友人、交流範囲も広がって行きます。ラストネームが日本名、日系の友達とも知り合います。その多くは日本語の読み書き、理解に乏しく、うちの息子は補習校に通い日本語を理解できること、日本社会の知識があることも自分のアイデンティティーとして、個性を見つめるようになりました。アメリカンの日本人であることを確信してきました。

また子供たちの興味、趣味の上からも長男はいわゆる”オタク” ゲームやアニメでは日本からの情報が大きく有利、次男は漫才好きで日本の時事も理解していないと笑えません。長女はジャニーズのファン、芸能記事、芸能雑誌も日本語が理解できないと分かりません。それぞれ日本のドラマやテレビ番組も大好きでネットで見ております。

補習校に通っていたおかげで日本語ばかりでなく 日本文化、政治、風習、通俗など多岐にわたり知識を得て現代の日本にも目を向けるようになりました。日本語を通して得た情報を現地の友人、ネットワークに紹介、発信しております。